

上越教育大学内附属小学校内高田教育研究会『教育創造 vol.169』掲載

【特集】子どもの学びをつなぐ「スタートカリキュラム」

幼児教育と小学校教育をつなぐ 生活科の教科特性とスタートカリキュラム

上越教育大学大学院教授 木村吉彦

はじめに

『小学校学習指導要領解説 生活編』では、「スタートカリキュラム」という用語が明記され（45頁）、幼児期の遊び中心の生活経験を踏まえた、合科的・関連的な学習の導入が低学年教育に必要であり、その中核を担うのが生活科であることが強調された。生活科のもつ幼保小連携上の重要性はこれからもますます強調されていくであろう。本稿では、幼児教育と小学校教育の違い、両者をつなぐ生活科の特性、そして、「スタートカリキュラム」について、その定義や意味付け、そして作成のポイントについて述べ、現在の我が国の学校教育の重要課題の一つである、幼保小連携及びスタートカリキュラムの理論的な背景を明らかにする。

I 幼児教育と小学校教育の違いと両者をつなぐ生活科

1. 幼児期から新入児童期の子どもの学び

子どもにとって小学校への入学とは、**遊び中心の生活から(教科)学習中心の生活へと生活スタイルが大きく変わる**ことである。幼児期の子どもたちは遊びながら様々な資質や能力を身に付けているが、小学校以降は、学びや育ちが点数化されたり行動内容によって判断・評価されたりする。どちらも「学び」「育ち」（様々な力や資質・能力を身に付けていく姿）は共通であるが、その質が違っていると言わざるを得ない。

そもそも、連携とは「同じ目的を持つ者が互いに連絡を取り、協力しあって物事を行うこと」であり、単なる「5歳児と小学校1年生だけの問題」ではない。幼保小連携の鍵は、幼児教育と小学校教育について、それぞれの教師がお互いをよく理解し合い、双方の子どもの育ちにつなげることである。異校種間連携にとってのキーワードは、「**相互理解**」と「**互惠性**」（お互いにメリットが見いだせる活動。具体的には交流授業など）である。

ここでは、まずはじめに「遊びの意義」を明らかにすることで、幼児教育と生活科の共通部分の意味を確認する。次に、幼児教育と小学校教育の違いを教育の「目的論」「方法論」「評価論」の3観点から明らかにし、両者をつなぐことで幼児期から新入児童期の連続的な学びを保つ生活科の特質を明らかにする。

2. 遊びの意義—幼児期から新入児童期の学びをつなぐ要素

幼児の生活の中心をなす遊びには子どもの成長にとってどんな意味があるだろうか。

遊びとは、自分で見つけた課題を自分なりの方法で、自分の力で実現・達成することのできる**自己実現体験(活動)**である。そこでは、**自己選択・自己決定の機会**がふんだんに与えられる。「やったあ!」という思い、「自分もなかなかやるもんだ」という思い、「ぼくもやればできる」という思い、これらの**達成感・自己肯定感が自分づくりの原点**である。**自分づくり、すなわち「主体性」の源の提供、これが遊びのもつ一番の意義**である。自分の好きな遊び(自分で決めた課題)に没頭・専念・集中でき、自分の力で実現を果たすという自己実現の経験から、「ぼくは、縄跳びが大好きです」、「私は鉄棒が得意です」というような、「自分は～ができます」、「自分は～が大好きです」「自分は～が得意です」という自分を意識・自覚することができるようになる。

一方、「小学校学習指導要領」の生活科以外の従来教科で言えば、漢字や計算のように、課題は自分で決められない。覚える内容が最初から決められていて、児童にとっては常に外からの課題としてやってくる。そして、その課題に自分はどうか対応するのか(どのように習得・活用できるか)が求められる。それが小学校以上の教育である。もちろん、私たちおとなも常に外から課題が与えられて、それにどう応えるかが問われる。**外からの課題に応える力の前提となる「内なる課題への対応力」をつくるのが幼児教育の遊びであり、生活科の遊び的要素であり、そこではぐくまれる主体性なのである。**自分の課題を自分で決めて、その実現に邁進、努力する。その経験の積み重ねが、やがて、外から与えられた課題にも対応できる力へとつながっていく。このような**自己実現の体験が、幼児期から新入児童期に最も必要とされる学び**である。

さらに言えば、私たちおとなにとっても言えることであるが、外からの課題に対して「仕方がないから言われたとおりに対応するしかない」では、真の意味の資質能力の向上にはつながらないであろう。やはり、外からの課題であっても、その内容を自分なりに受け止め直し、「内なる課題」として捉え直し、その対応策を考察・判断・実行することで、真の自分自身の資質能力向上につながる。客観的には外からの課題であっても自分自身の内なる課題として受け止め直し対応することが、私たちの一生の課題である。つまり、「遊び」とは、**子どものみならず、私たち人間にとって人生の根本課題に対応するための原体験**なのである。

3. 幼児教育と小学校教育の違い

①教育目的の観点から

『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』の中の「ねらい」を具体的に見てみると、それらは**育てたい子ども像**であり、子どもを**育てる方向性**を示したものである。例えば、領域「健康」のねらいの(2)は次のようになっている。

(2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。

このねらいは、「自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとするのできる子ども」、つまり運動好きの子どもを育てるという**「めざす子ども像」**を示している。幼児教育のねらいは、その方向に子どもを育てようという提案を意味している。サッカーで運動好きになってもよいし、縄跳びで運動好きの子どもになってもかまわない。また、シュートが上手かどうか、縄跳びが何回跳べるかは特に問われない。このように**子どもの育ちの方向性を示す教育目標のことを 方向目標(一般目標とも言う) と言う。**

一方、小学校ではどうだろうか。「なわとび名人カード」というものを多くの小学校で出している。教科・体育の目標として「運動好きの子どもを育てたい」という方向目標もあるはずではあるが、実際の授業となると、例えば、1年生では前回り30回以上跳べないと「なわとび名人」としてのスタンプはもらえない。このような教育目標を**到達目標**と言う。このように小学校教育では、その達成度・到達度を中心に学習が展開される。それに対して、幼児教育ではその子が育っている方向性を大事にし、どこまでできるかの到達目標は基本的に問わない。

方向目標中心か到達目標中心かが教育目的論から見た両者の違いである。もちろん、どっちがよいわるいの問題ではない。

②教育方法の観点から

幼児教育の基本は「環境を通して行う教（保）育」である。これは、子どもが自分から進んで動き出したいくなるような教（保）育環境設定に基づく教育・保育が展開されることを意味する。これを**間接教育**と言う。すなわち、**間接教育とは、教（保）育のねらいや目標を学習（保育）環境に反映させることによって、学習者（子ども）の主体的な活動を誘発しようとする教育の方法**のことである。そのとき、学習（保育）環境を構成する要素として「**人的環境**」「**物的環境**」の二つが考えられる。

一方、教科書を使って行われる方法に代表される**直接教育**が小学校以上の教育方法の中心である。「何頁を開きなさい、そこを読みなさい。」というように、教師のねらいや意図を直接指示・命令することで行われる教育方法である。

間接教育を中心として教育・保育が展開されるのが幼児教育。直接教育を中心として（教科学習中心の）教育が展開されるのが小学校教育である。ここでも、どちらがよいわるいの問題ではない。幼児教育にあっても「次はお食事だから手を洗いましょうね。」といった直接的な指示による保育も行われるからである。

③教育評価の観点から

幼児教育では、その子のかつての姿と今の姿を比べてその「伸び」を明らかにすることで**子ども理解を大切に**する。この評価のあり方を**個人内評価**と言う。これは、他者との比較によらないので明らかに**絶対評価**である。幼児教育の評価では、徹底した絶対評価が基本である。**個人内評価とは、子どもを全人的に捉えながら行う保育・教育にとって重要な評価のあり方**である。

さらに言えば、「幼稚園幼児指導要録」では、子どもの姿を文章により記述し、特に成長の著しかった領域についての子どもの姿を書き出すことが求められている。

一方、ここ20年ほど、小学校以上の学校教育においても絶対評価が主流になっている。小学校では、教育目標を子どもの姿で書き出した「**評価規準**」を指導案に書き出す。これが、「**目標準拠評価**」と呼ばれる小学校教育での絶対評価のあり方である。最終的には、ABCによる段階評価を「指導要録」に書き出さなくてはならない。ここで大切なことは「**評価の基本＝子ども理解**」という発想である。これは、幼児教育や生活科の評価の基本でもある「**はじめに子ども理解あり**」に徹することこそが現在の学校評価の基本であることを意味している。

結論としては、幼児教育の評価は個人内評価という徹底した絶対評価に基づく。一方、小学校では、目標準拠評価という教師のねらいと子どもの発達実態に即した絶対評価が

求められている。

4. 幼児教育と小学校教育をつなぐものとしての生活科

次に生活科の教科特性を、やはり3つの観点から明らかにしよう。

①教育目的の観点から

生活科の究極的な目標は「自立への基礎を養う」という抽象的な内容である。人間が独り立ちするための基礎的部分を育てるという子ども像と育てたい方向性が示されている。これは明らかに「方向目標」である。しかし、実際の授業では、子どもたちが独り立ちに向かってどのくらい育ったかを見取りつつ、また独り立ちするための資質・能力を「到達目標」や「行動目標」として設定して授業を展開して構わない。例えば、この単元を通して、子ども達が「自分の考えを人前で堂々と発表できるように指導しよう（自己表現力の育成）」という到達目標（行動目標）を設定して活動に取り組んでよい。つまり、生活科の場合、個々の単元や個々の児童に対しては、具体的な「到達目標（行動目標）」を設定することは可能であるし、全く問題はない。

このように、**生活科の教育目標は、「到達目標を内に含んだ方向目標」**なのである。このように、教育目標を構造化して考えることで、生活科実践がよりスムーズに展開できる。

②教育方法の観点から

例えば、「秋をさがそう」という単元では、教師がどんぐりを教室に持ってきて見せて「これが秋ですよ、覚えなさい」と教えるようなことはしない。そうではなく、低学年教師は子どもたちに秋を見つけさせようとして公園に連れて行き、子どもたちが自分から秋を見つけるように仕組む。秋を見つけさせたいという教師のねらいが反映された公園という教育環境（物的環境）に子どもを連れ出し、子どもが自分から秋を見つけたくなるような言葉がけをして（人的環境としての教師として）授業をする。これは、まさしく間接教育の考え方による教育方法である。

一方、教室に戻ったら、作文シートや学習カードに今日の活動や感想を書く時間を設ける。このとき教師は、「カードや作文に書いてね」と直接指示をする。

生活科の方法論の基本は、あくまで子どもが自ら動き出したくなるような学習環境を設定することであり、「教え込み」「指示・命令」は極力控えなければならない。しかし同時に、振り返りや記録を残す作業も重要である。

このように、**生活科の方法論の基本は間接教育であり、「教え込み」「指示・命令」は極力控えるが、適宜直接教育も取り入れた指導が行われる。**

③教育評価の観点から

生活科では対象が小学校低学年ということもあり、絶対評価の考え方を基本にして評価活動を進めなくてはならない。他児との比較によるのではなく、まさに**その子の「伸び」を認めて褒めてあげる**ことが基本である。しかし、小学校なので、指導案の中には「評価規準」が書き出されてある。その目標に関してどのような姿を見せているか、そして、その目標に対してどのレベルにまで達しているかを見極めるのが生活科の評価活動になる。他者と比べることはないが、教師の設定したねらい、すなわち「評価規準」に忠実に学習活動を展開することが求められる。従って、**生活科の評価は評価規準(A・B・Cによる評価)を前提とした個人内評価である。**

さらに言えば、生活科においては「いいところを見つけ」が評価(子ども理解)の原則である。そのことで、児童の自己肯定感を引き出し、生きる自信を与え、自立への基礎づくりにつながる。このことが、やがては「生きる力」育成という現代日本の学校教育の究極目標に結びついていく。

④幼小連携の鍵を握る教科としての生活科

以上から生活科の場合、教育目的は「到達目標を内に含んだ方向目標」、教育方法は「間接教育中心で適宜直接教育を取り入れる」、教育評価は「評価規準を前提とした個人内評価」である。このように、**生活科は、幼児教育と小学校教育の両方の性格を併せ持つ教科であり、幼保小連携の鍵を握る教科である。**それは、**生活科が幼児期から新入児童期の学びをつなぐ役割を果たしていることを意味している。**

II スタートカリキュラムと生活科実践

生活科は、教科の性格上、国語・音楽・図工など他教科等との関連が深く、今回の改訂においてもますますその必要性が強調された。同時に他教科(国語・音楽・図工)の指導要領においても、「指導計画の作成と内容の取扱い」のなかで、「低学年における生活科との積極的な関連」が明示された。生活科の学習指導に当たっては、低学年教育全体を視野に入れて、他教科等との関連を図りながら進めていくことがますます求められている。

今改訂において、「生活科の指導計画作成と内容の取扱い」の中に、「特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。」が付加され、この文言を基に『解説』「第4章 指導計画作成上の配慮事項」の(3)に、「スタートカリキュラムの編成」が新入児童の小学校生活への適応を促し、小1プロブレムなどの問題解決に効果的であるという見解が示された。

以上のような、スタートカリキュラム作成の必要性を確認した上で、『解説』を基にしながら、ここでは、それぞれのキーワードについての筆者なりの定義付けを行う。合科的な指導と関連的な指導との区別については、『解説』の文言だけでは理解しにくいいため、筆者の思いきった見解を以下に書き出す。

1. スタートカリキュラムとは

スタートカリキュラムとは、新入児童の入学直後約1ヶ月間において、児童が幼児期に体験してきた遊び的要素とこれからの小学校生活の中心をなす教科学習の要素の両方を組み合わせた、合科的・関連的な学習プログラムのことである。とりわけ、入学当初の生活科を中核とした合科的な指導は、児童に「**明日も学校に来たい**」という意欲をかき立て、幼児教育から小学校教育への円滑な接続をもたらし、**新入児童の小学校へのスムーズな「適応」**を促してくれることが期待される。

2. 合科的な指導とは

合科的な指導とは、学習のねらいとして、抽象度の高い「**方向目標**」(育てたい子どもの全体像を示した教育目標)を定め、その目標を達成するために、遊び的要素の強い活

動や教科にも連動するような活動を取り入れ、児童の登校意欲や学習意欲を高めるような指導のことである。

例えば、「がっこうだいすき」という単元名にし、目標を「学校が大好きになり、明日も学校に来たいと思える子ども」を育てることと設定したとする。実際の活動の中には、ゲームやダンスといった遊び的な活動と並行して、例えば、学校探検（生活科）・自己紹介（国語）・友だち何人？（算数）・校歌を歌おう（音楽）・自画像で自己紹介（図工）などを取り入れ、やがて様々な教科学習に結びつく活動を遊びながら展開していくことが考えられる。スタートカリキュラムは、「育てたい子ども像＝活動を中心とした学習全体のねらい」が先にある合科的指導が相応しいと考える。

生活科の持つ教科目標の抽象度の高さ（自立への基礎を養う）と学習の自由度の大きさ（学習の大枠は教師が決めるが具体的な活動や学習内容は子どもが決められる）が、スタートカリキュラムをより効果的にするのである。スタートカリキュラムが生活科を中核とした合科的な指導計画に基づくことが望ましいという理由は、ここにある。

3. 関連的な指導とは

一方、関連的な指導とは、ある一つの教科の目標を中心に据え、その目標を達成するために他教科の活動を取り入れて行う学習指導プログラムのことである。例えば、生活科でアサガオ栽培に取り組み、「アサガオさんとともだち」という単元を設定し、「アサガオに強い愛着を持ち『ぼく・わたしのアサガオ』という意識を高める」という目標を設定したとする。アサガオに愛着を持たせるために、学習カードに絵や作文をかく活動（図工・国語）、アサガオの花や種の数进行数える活動（算数）、アサガオのつるでリースを作る活動（図工。このとき、まだ緑が残っているので切りたくないという子が出る→命の問題＝道徳）などを関連させることで、生活科のねらい（継続的な栽培活動を通してアサガオの生長と自分自身の成長に気付く）をより確実に達成することが可能となる。もちろん、学級での話し合い活動（特活）も生活科学習では大変重要である。生活科の日常的・継続的な活動を他教科や領域学習の素材とすることで、様々な側面からの表現力を身に付けることができる。同時に、生活科は学級集団作りにとっても有効な学習活動である。これは、低学年教育全体として取り入れたい学習スタイルである。「**題材は生活で、表現は他教科で**」学習することで、様々な教科との関連も重要であるという生活科の教科特性を象徴するのが関連的な指導である。合科的指導・関連的な指導の両方の活用によって、新入児童の教科学習への接続がよりスムーズに果たされることにつながる。

Ⅲ スタートカリキュラムの意義と作成のポイント

1. 小1プロブレムの克服

子どもにとっては、遊び中心の生活から教科学習中心の生活へと生活スタイルが変化することは、かなり大きな「**段差**」である。これまでは、自分で決めた課題（自分のしたい遊び）を自分で達成する（自分の力で実現する）生活が中心であったが、教科学習では外から来る課題に自分がどのように対処するのか（知識・技能の習得が中心）が問われるからである。

それと同時に、自力での登・下校、時間割に基づく生活、施設・設備の違い等々、子ども目線からすれば多くの「段差」が観られる。そのとき、これまで経験してきた「遊び」の要素を多く含んだ活動に基づく日々が送れることは、子どもにとって「小学校でもこれまでやってきたことが通用するのだ」という自信が持てるきっかけになる。これが、スムーズな「適応」を生み出すというスタートカリキュラムの第一の意義である。

ただし、ここで確認しておきたいことがある。それは、**スタートカリキュラムが、小1プロブレム対策のための対症療法を意味するものではない**、ということである。スタートカリキュラムは、生活科設立の趣旨である「子どもの発達実態に基づき、一人一人の子ども理解をもとに学習を進める」という発想に基づいたカリキュラムであり、文字通り、生活科本来の趣旨に則った学習活動であることをここで確認する。

2. 子どもも安心・保護者も安心・先生も安心

1. で述べたことは、**子どもにとっての安心プログラム**と言える。それに加え、全校体制でスタートカリキュラムに取り組むことで、保護者や担任教師も安心して新入児童と関わることができる。具体的には、以下のようなプランニングと実践がスタートカリキュラム作成のポイントとなる。

①**保護者も安心**… 1週間ごとの教育目標が週の初めにあらかじめ示され、かつ、明日の持ち物や活動予定を知らせてもらうことで、保護者は安心して子どもたちを学校に送り出すことができる。特に、1週間の予定表を事前配布され、各教科の配当時数等が示されていると、「ちゃんと勉強しているんだ」と喜んでくれる。全校を挙げて、保護者に説明責任を果たすことで、保護者からの理解と協力が得られる。

②**先生も安心**…担任のみならず、入学後約1ヶ月間は管理職、養護教諭、少人数指導教諭、特別支援教諭、また保護者によるボランティアサポーター等、様々なおとなに新入児童を見守ってもらいたい。そうすることで、子ども達は安心感と安定感を持つことができ、担任の先生も焦らず、じっくり自分の担任する子ども達の様子（実態）を見取ることができる。たった一人で30人もの新入児童を世話することの大変さを考えると、複数教員での世話は、担任に心の余裕を与えてくれる。それによって、担任教諭は、「子ども理解を第一の課題とする」低学年教育のあるべき姿を実感することができる。

3. 小学校生活に必要な生活習慣形成

小1プロブレムなどでも論じられているが、学校生活に必要な生活習慣（ルール遵守の精神や規範意識）を身に付けなくては、新入児童のその後の小学校生活に支障をきたしてしまう。既に述べたように、スタートカリキュラムでは、遊び的要素の多い活動から小学校生活に入るのので、子どもたちは、楽しみながら相手意識をもって「先生との接し方」「友達との接し方」を学ぶことができる。また、生活科の学校探検などを学習活動の中核にする場合が多いので、「廊下の歩き方」や「おとなへのあいさつの仕方」「自己紹介（自己主張）の仕方」等々、人間関係づくりの基礎・基本を学ぶことができる。多くの学校では、「ソーシャルスキルトレーニング」をスタートカリキュラムに取り入れていると思われるが、楽しみながら、かつ、達成感・成就感（自己充実感や自己肯定感）を経験しながら、社会性を身に付けるように指導してほしい。

おわりに

この時期の自己中心性とは、自分にとって身近なものについてはよく学ぶ（よく覚える・よく身に付ける）という特徴をもっている。従って、自分の好きな遊びや自ら選んだ活動に「没頭する体験」が重要である。この体験が**集中力を生み、人間としての主体性の源**を創る。また、この時期の諸感覚をフルに使った活動が感覚（感性）的な課題発見力を育てる。「遊びの意義」においても述べたが、とりわけこの時期に育つ集中力は「ぼくは～が大好きです」「わたしは〇〇が得意です」などと、**自信を持って自分を前面に出す力(主体的に生きる力)**に結びつく。これが、文字通り「自立（独り立ち）への基礎」である。生活科が最も大切に「自己肯定感」は、幼児期から児童期初期にかけての「自己実現」体験や「成就感・達成感」経験がもたらしてくれるものであり、**主体的に生きる人生のスタートライン**を示してくれるものである。「**スタートカリキュラムとは、人生のスタートカリキュラムである**」とはこのことを意味する。

【参考・引用文献】

文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』（日本文教出版・2008）

木村吉彦編著『小学校 新学習指導要領の展開 生活科編』（明治図書・2008）

篠原孝子・田村学編著『こうすればうまくいく 幼稚園・保育所と小学校の連携ポイント』

（ぎょうせい・2009）

高階玲治編集『幼・小・中・高の連携・一貫教育の展開』（教育開発研究所・2009）

木村吉彦監修・仙台市教育委員会編『スタートカリキュラムのすべて 仙台市発信・幼小連携の新しい視点』

（ぎょうせい・2010）